

# 家庭内における性役割行動の認識がストレス対処行動に及ぼす影響

大井修三<sup>1)</sup>, 今枝未紗<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>岐阜女子大学, <sup>2)</sup>羽島市役所

(2021年11月19日受理)

## The Effect of Recognition of Domestic Gender Role on Stress Coping Behavior

<sup>1)</sup>Gifu Woman's University, <sup>2)</sup>Hashima City Office

Shuzo OHI<sup>1)</sup>, Misa IMAEDA<sup>2)</sup>

(Received November 21, 2021)

### Summary

Although the stress coping behaviors are different between by male and by female, the perception of social gender role are not different between both sexes. Because the generally used scale of social gender role was constructed on the premise of public field, in this research, the scale of social gender role in private/domestic field bringing out real feelings was used. The results showed that the perception of domestic gender role was not related to any type of coping. But, the more frequently male type playing in childhood was the more the coping type of problem solving and the less the coping type of emotional/avoiding. While, the more frequently female type playing, the more coping type of support desire and of emotional/avoiding.

Key words: gender, domestic gender role, childhood playing type, stress coping, social maladjustment

### 要 旨

ストレス対処に性差があるにもかかわらず、社会的性役割認識に男女差が見られない。それは、従来使われてきた社会的性役割認識尺度が、ストレスに影響する性役割を測定できていないからであると考えた。そのため、現在でも残っている家庭内の伝統的な性役割認識が、ストレス対処行動に影響するという仮説を立て、その検証を本研究の目的とした。その結果、家庭内の性別役割認識を持っていてもストレス対処行動に影響は表れなかった。しかし、子供期の遊び体験では、男児遊びが多いと問題解決対処が多く、情動・回避対処が少なかった。一方、女児遊びが多いとサポート希求

対処と情動・回避対処が多かった。幼児・児童期の遊びに対処法が内在し、それがその後の対処行動を決めていることを明らかにした。

キーワード：性差，家庭内性役割認識，児童期の遊び，ストレス対処，社会的不適応

ストレス社会といわれる現代において，社会的不適応が生じる大きな原因に，ストレスにうまく対処できないことが想定される。大井・今枝（2017）は，その社会的不適応行動に性差が見られることから，その原因を社会に存在する性役割期待ではないかと考えて，ストレス対処行動と性役割期待の性差に関する研究を概観した。一方で，男女どちらでも，性役割期待の男性性・女性性傾向の強さが，対処行動の選択に関係している傾向も見られた。

しかし，近年の日本社会においては，性役割期待を伝統的な性役割尺度で測定すると，生物学的性別（以下，性別と表す）間に差が見られない。また，ストレス対処行動の性差の報告が多くあるにもかかわらず，その性差が必ずしも性別に期待される対処行動とは一致しなかった。一方で，私的な場面では，男女で期待される役割が違うことが実感される。

これらのことから，私的な場面での性役割期待を測定することで，社会的不適応を解決するための手がかりが得られることが期待される。しかし，私的な場面での性役割期待を測定する尺度がみられない。

そこで，大井・今枝（2019）は，公的な場面を前提とした性役割期待を測定する伝統的な尺度では，性別に依存した性役割は測定できない可能性があるので，私的な場面における性役割期待を測定する尺度を構成した。その結果，女性役割行動，男性役割行動，子供の遊びの3下位尺度15項目からなる家庭内性役割行動尺度を構成した。この尺度の妥当性

を検討したところ，評価者の性別にかかわらず，それぞれの尺度で対応する性別に相応しいとする回答が高率で示された。このことは，日常の家庭内でみられる性役割認識を測定する尺度として，妥当性を十分に満たすものと考えられた。

一方で，本研究の本来の課題は，ストレス対処行動に性差があり，その原因を明らかにすることであった。そのため，ストレス対処行動を測定するための尺度が必要となる。ストレス対処行動尺度は，Lazarus & Folkman（1980）によって最初に構成された。彼らの認知ストレス理論に基づき，対処行動を，原因に対処しようとする「問題中心の対処」と，葛藤による情緒的な苦痛を低減させようとする「情動中心の対処」の二種類に分類した尺度を構成した（The Ways of Coping Questionnaire：以下，WCQとする）。

しかし，Endler & Parker（1990）は，WCQを使用した多くの研究で，より多くの因子が抽出されることに注目し，自らの尺度構成で，WCQの2下位尺度に加えて，第3の下位尺度，回避優先の3下位尺度で構成される尺度CISS（Coping Inventory for Stressful Situation）を構成した。日本においても，ストレス対処行動の研究で多く用いられてきている（たとえば，古川・鈴木・齋藤・濱中，1993）。

しかし，性役割期待が文化に大きく影響されるように，ストレスも文化によって影響を受けると考えられる。であれば，ストレスに対する対処法も文化に影響を受けると考えられる。そこで，大井・今枝（2020）は，日本で対処行動を調べるのに適切であるストレス

対処行動尺度が必要であると考えて、CISSを基に表現を一部修正した項目を用いて、ストレス対処行動尺度を構成した。この尺度は、問題解決対処6項目、サポート希求対処6項目、情動・回避対処6項目の3下位尺度18項目で構成された。本研究では、この尺度を用いて、以下の仮説を検証することを目的とした。

これまでの研究は、ストレス対処行動には性差があることを報告してきた。Lazarus & Folkman と加藤 (1999) は、男性は女性よりも問題解決的な対処を多く行うことを示した。しかし、金・小川 (1997) と早瀬 (2008) は、その反対に、女性が男性よりも問題解決的な対処を多く行うことを報告した。

「サポート希求対処」については、金・小川が、女性は男性よりもソーシャルサポートを求めるという結果を示した。それに加えて、武藤 (2002) も、女性は男性よりもストレス時に多くソーシャルサポートを求め、受けることを報告した。それらの報告から、女性は男性よりも「サポート希求対処」を多く用いることが期待された。

また、Endler & Parker と早瀬は、女性は男性よりも、情動的な対処や回避的な対処を多く用いることを報告した。これらから、女性は男性よりも「情動・回避的対処」を多く用いることが期待され、次の仮説1を設定した。  
**仮説1**：ストレス場面において、男性は女性よりも「問題解決的対処」を多く用いる。また、女性は男性よりも、「サポート希求対処」「情動・回避的対処」を多く用いる。

性役割期待とストレス対処行動の関係に関する研究では、これまで一貫した結果が得られてこなかった。しかし、加藤 (2001)、金・小川、早瀬においては、男性性が高いことが問題解決的対処を多く行わせていた。また、金・小川は、女性性が高いと「サポート希求

対処」を多く行うことを報告した。そうであれば、本研究で用いられる私的場面である家庭内の性役割認識においても、「男性役割行動」や「男児の遊び」が、「問題解決的対処」を多く起こすように影響を与えていると考えられる。また、「女性役割行動」や「女児の遊び」は、「サポート希求対処」を引き起こすように影響を与えていると考えられる。

一方「情動・回避的対処」については、これまでの研究では、女性に多く見られたが性役割の影響は見出されてこなかった。しかし、「情動・回避的対処」は、女性に多く見られることや、積極的に問題に向き合うことが男性性の影響を受けているのであれば、感情的になったり、問題から遠ざかるといった「情動・回避的対処」は、女性性と関係していると考えられる。したがって、家庭内での女性の伝統的な役割を反映した「女性役割行動」や「女児の遊び」が多いと、「情動・回避的対処」が多くなると考えられるので、次の仮説2を設定した。

**仮説2**：「男児の遊び」を多くする人、もしくは、現在や将来「男性役割行動」を多くする人は、少ない人に比べて「問題解決的対処」を多く行う。一方、「女児の遊び」を多くする人、もしくは現在や将来「女性役割行動」を多くする人は、少ない人に比べて「サポート希求対処」や「情動・回避的対処」を多く行う。

性別に一致した性役割認識を強く持つ人は、異性に対しても同じことを期待すると考えられる。すなわち、これらの性役割を性別に応じて明瞭に区別する人は、性役割期待に沿って行動をしていると期待される。一方、性役割を性別に応じて明瞭に区別していない人は、性役割期待にあまり気を置かない人であると思われる。したがって、前者は後者よりも、自らの性別に応じた対応行動を多く行

うのではないかと考えられる。したがって、次の仮説3を設定した。

**仮説3**：男性で性役割を明瞭に区別する人は、性役割を明瞭に区別しない人に比べて、「問題解決的対処」を多く行う。女性で性役割を明瞭に区別する人は、性役割を明瞭に区別しない人に比べて、「サポート希求対処」「情動・回避的対処」を多く行う。

## 方法

### 1. 調査対象者

調査対象者は、岐阜県・愛知県内の6つの大学に通う大学生233名であった。性別の内訳は、男性が128名、女性が105名であった。平均年齢は20.1歳であった。調査協力者のうち男性1名が、家庭内の行動を測定する質問紙のみ回答が得られなかった。そのため、家庭内の性役割行動尺度を用いる分析から除外した。そのため、家庭内の行動と関わりのない分析では、分析対象者は233名(男性128名、女性105名)であり、家庭内の性役割行動が関連する分析においては、分析対象者は232名(男性127名、女性105名)であった。

### 2. 調査用紙

調査用紙は、調査の依頼と目的が書かれたフェイスシート1枚(A)、家庭内における性役割行動の認識に関する質問紙1枚(B)、ストレス対処行動に関する質問紙1枚(C)、家庭内における性役割行動を調査する質問紙2枚(D)の計5枚で構成された。

#### A. フェイスシート

フェイスシートには、以下のことが書かれた。この調査には、協力者の自由な意思の基で回答をしてもらうこと、調査の結果は統計的に処理されるだけで、その他の目的に使用しないこと、調査対象者には拒絶、途中離脱

の権利があることを明示した。また、年齢と性別を尋ねる欄を設けた。

#### B. 家庭内における性役割行動の認識に関する質問紙

家庭内における性役割行動の認識を調べる質問紙には、大井・今枝(2018)で作成された家庭内における性役割行動の尺度を用いた。この尺度は、「女性役割行動」を5項目、「男性役割行動」を5項目、「子どもの遊び」を5項目の計15項目から構成され、7件法で回答を求められた。

これらの家庭内で行われる行動の項目について、どれくらい性別を区別して捉えているのかを調べるために、15項目それぞれが、男女どちらが行う行動と思うかを、「絶対に男性の役割・行動である」「ほぼ男性の役割・行動である」「どちらかという男性の役割・行動である」「どちらでもいい」「どちらかという女性の役割・行動である」「ほぼ女性の役割・行動である」「絶対に女性の役割・行動である」の7件法で回答を求めた。

なお、質問欄には、15項目の行動について、男女のどちらが行うことが正しいかを尋ねるものではないことを明記した。

#### C. ストレス対処行動を測定する質問紙

ストレス対処行動を測定する質問紙には、大井・今枝(2020)において構成された3下位尺度18項目のストレス対処行動尺度を使用した。項目は、「問題解決的対処」の項目が6項目、「サポート希求対処」の項目が6項目、「情動・回避的対処」の項目が6項目であり、ストレスを感じたときに、それを解決したり、苦痛を軽減したりするために、それらの対処行動をどれくらいするかを、以下の4件法で回答を求めた。選択肢は、「よくする」「時々する」「あまりしない」「まったくしない」であった。

#### D. 家庭における性役割行動の有無を調査する質問紙

家庭における性役割行動の認識に加えて、実際の行動をしているかどうかを調べるために、大井・今枝(2018)で作成した家庭における性役割行動の質問紙を用いた。また、質問紙の下位尺度に「子どもの遊び」項目を用いて、子どもの頃に、そのような遊びをしたかを尋ねた。また、現在は、家庭における役割行動は、両親が行うことが多いと考えられることから、現在の行動に加えて、将来の自分が家庭でとるであろう行動についての調査を行った。したがって、家庭内の行動の質問については、過去・現在・将来と3場面を設定した。

過去の行動については「子どもの遊び」項目5項目(男児遊び2項目, 女児遊び2項目, 両性ともする遊び1項目)を用いた。それらについて、「よくした」「ときどきした」「たまにした」「まったくしなかった」の4件法で回答を求めた。現在の行動については「男性役割行動」5項目と、「女性役割行動」5項目の計10項目を用いた。それらについて、「よくする」「時々する」「あまりしない」「全くしない」の4件法で回答を求めた。将来の行動については、現在の行動と同様に、「男性役割行動」5項目と、「女性役割行動」5項目の計10項目を用いた。それらについて、将来「するだろう」「時々するだろう」「あまりしないだろう」「まったくしないだろう」の4件法で回答を求めた。また、下宿生につい

ては、「男性役割行動」「女性役割行動」の両方を行っていると考えられるため、実家での行動を想起して回答を求めた。

#### 3. 手続き

本調査の一部は、講義のはじめに集団で実施された。また一部は、個人的に質問紙を配布し、やり方を説明して後日回収する方法で実施した。

講義で実施した場合には、調査用紙を配布する前に、調査の目的、倫理的配慮、調査に協力することの不安などの説明と質問を受け、その後に、質問紙を配布し、それぞれのペースで回答をさせた。全員が回答し終わったことを確認して回収した。

個人的に配布して行った調査については、集団調査のときの説明と同様の説明を行ってから、調査対象者に調査用紙を手渡しし、配布後1週間を目処に回収した。回収率は97.5%であった。

#### 結果

##### 1. ストレス対処行動の性差の検討

本研究の目的は、家庭内における性役割行動がストレス対処行動に与える影響を検討することであった。そして、その前提にストレス対処行動には、性差が存在するという先行研究の結果があった。そこで、本研究においても、「問題解決的対処」「サポート希求対処」「情動・回避的対処」の3種類のストレス対

表1 対処行動得点の男女別平均値・SDと男女間のt検定の結果

	男性(N=128)		女性(N=105)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
問題解決的対処	2.92	0.57	2.90	0.55	t(231) = 0.314
サポート希求対処	2.59	0.61	2.85	0.58	t(231) = 3.238**
回避・情動的対処	2.35	0.56	2.64	0.54	t(231) = 4.115**

\*\*p<.01



処行動に、性差があるのかを検討した。

ストレス対処行動尺度の評定は、「よくする」から「全くしない」の4件法であり、それぞれの評定に対して、4,3,2,1の数字を割り当てて得点化した。次に、各対処行動は6項目で構成されていたため、被験者ごとに各対処行動の項目平均値を算出し、これを各対処行動得点とした。この対処行動得点に基づいて、各対処行動に男女差があるのかを検討するために、各対処行動について性別を独立変数、各対処行動得点を従属変数として、男女間でt検定を行った(表1)。その結果、「問題解決的対処」においては、男女間で有意差はなかったが、「サポート希求対処」「情動・回避的対処」においては、女性が男性よりも有意に得点が高かった(サポート希求対処:t(231)=3.238, p<.01, 回避・情動的対処:t(231)=4.115, p<.01)。

## 2. 家庭内における性役割行動の認識とストレス対処行動の関連

本研究で用いられた家庭内における性役割行動の認識を測定する調査の回答を以下のように得点化した。回答に用いられた選択肢は、「絶対に男性がする行動である」～「絶対に女性がする行動である」の7件法であり、それぞれの評定語に、7,6,5,4,3,2,1の数字を割り当てた。そのため、得点が高いほど、男性の役割行動と認識していることを意味し、得点が高いほど女性の役割行動と認識していることを意味している。また、4点に近いほど、「どちらの行動でもよい」と評価しており、

質問項目に対して、性別を区別していないことを意味すると解釈された。

そこで、家庭内の性役割行動の認識について、被験者ごとに男性役割行動項目の平均点を算出し、それを男性役割認識得点とした。また、女性役割行動項目の平均点を算出し、それを女性役割認識得点とした。

次に、男女で男性役割認識得点と女性役割認識得点に差があるのかを検討するため、男女間で性役割認識得点に違いがあるのかを検討するために、性別を独立変数、性役割認識得点を従属変数としてt検定を行った(表2)。その結果、男性役割認識得点では男性が女性よりも有意に高かった(t(231)=4.622, p<.01)。しかし、女性役割認識得点では、男女で差が見られなかった。

そこで、性役割行動を性別に付随して区別している人と、区別していない人でストレス対処行動が異なるかを検討した。このために、各被験者の男性役割認識得点から女性役割認識得点の差を求め、性役割行動区別得点とした。この得点は、大きいほど男女の性役割を区別していることを示す。全被験者で中央値を算出したところ、性役割行動区別得点の中央値は2.00であった。そこで、性役割区別得点が、中央値よりも高い群を性役割区別明瞭群、中央値よりも低い群を性役割区別不明瞭群とした。また、その際、性役割区別得点が中央値と一致した者と、男性役割認識得点が4.00以下、女性役割認識得点が4.00以上の被験者は、この分析から除外した。したがって、分析対象者は、明瞭群は90名(男性56名、

表2 性役割認識得点の男女別平均値・SDとt検定の結果

	全体(N=233)		男性(N=128)		女性(N=105)		性別間のt値
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
男性役割認識得点	5.47	0.73	5.66	0.71	5.23	0.69	t(231)=4.622**
女性役割認識得点	3.50	0.56	3.54	0.55	3.45	0.58	t(231)=1.261

\*\* : p<.01

女性34名)であり, 不明瞭群は44名(男性19名, 女性25名)であった。

性役割区別明瞭群と性役割区別不明瞭群の間で, ストレス対処行動に差があるのかを検討するために, 性役割区別明瞭群・不明瞭群間を独立変数, 各対処行動得点を従属変数としてt検定を行った。その結果, どの対処行動においても, 性役割区別明瞭群・不明瞭群間で有意な差は見られなかった(表3)。

### 3. 家庭内における性役割行動とストレス対処行動の関連

#### 3-1 現在の性役割行動とストレス対処行動

性役割行動の認識を調査すると同時に, 研究1で作成した質問紙の男性役割行動, 女性役割行動を実際に行っているかを調査した。それぞれの項目について, 「よくする」「時々する」「あまりしない」「まったくしない」の4件法で評定を求めた。そのため, それらに4,3,2,1の点数を与えて得点化した。全被験者において, 「男性役割行動項目」「女性役割行動項目」のそれぞれの平均値を算出し, 「現在の男性役割行動得点」「現在の女性役割行動得点」とした。そして男女間で, 「現在の男性役割行動得点」「現在の女性役割行動得点」それぞれに差があるのかを検討するため,

性別を独立変数, 性役割行動を従属変数としたt検定を行った(表4)。

その結果, 「現在の男性役割行動」では, 男性が女性よりも現在の男性役割行動得点が有意に高かった。また, 「現在の女性役割行動」では, 女性が男性よりも有意に女性役割行動得点が高かった。(現在の男性役割行動得点:  $t(229.66)=5.322$ ,  $p<.01$ , 現在の女性役割行動得点:  $t(230)=3.519$ ,  $p<.01$ 。

また, 「現在の男性役割行動得点」や「現在の女性役割行動得点」の高群と低群で, ストレス対処行動に違いが見られるかを検討するため, 「現在の男性役割行動得点」や「現在の女性役割行動得点」の高群と低群で分けて, ストレス対処行動得点を比較した。高群と低群を分ける際は, 「現在の男性役割行動得点」が3.00以上の者を「現在の男性役割行動高群」, 2.00より低い者を「現在の男性役割行動低群」とした。「現在の女性役割行動得点」についても同様に, 「現在の女性役割行動得点」が3.00以上の者を「現在の女性役割行動高群」, 2.00より低い者を「現在の女性役割行動低群」とした。

まず, 男女を区別せずに, 「現在の男性役割行動得点」の高群と低群間で各ストレス対処行動を比較した。分析対象は, 「現在の男

表3 性役割区別明瞭・不明瞭群の各ストレス対処行動の平均・SDとt検定の結果

	明瞭群(N=90)		不明瞭群(44名)		t値
	平均	SD	平均	SD	
問題解決の対処	2.88	0.58	2.81	0.53	$t(132)=0.604$
サポート希求の対処	2.64	0.66	2.62	0.65	$t(132)=0.191$
情動・回避的の対処	2.49	0.55	2.41	0.58	$t(132)=0.706$

表4 現在の性役割行動得点の男女別平均値・SDとt検定の結果

	男性(N=127)		女性(N=105)		t値
	平均	SD	平均	SD	
現在の男性役割行動得点	2.28	0.55	1.94	0.44	$t(229.66)=5.322^{***\dagger}$
現在の女性役割行動得点	2.19	0.65	2.51	0.73	$t(230)=3.519^{**}$

†: Welchの方法 \*\*: $p<.01$

性役割行動得点」高群が21名（男性19名，女性2名），低群が86名（男性31名，女性55名）であった。「現在の男性役割行動得点」を独立変数，各ストレス対処行動得点を従属変数として，t検定を行った（表5）。その結果，どの対処行動においても有意差が見られなかった。

また，「現在の女性役割行動得点」の高群と低群間でストレス対処行動を比較した。分析対象は，「現在の女性役割行動得点」高群が41名（男性14名，女性27名），低群が62名（男性41名，女性21名）であった。「現在の女性役割行動得点」を独立変数，各ストレス対処行動得点を従属変数としてt検定を行った（表6）。その結果，どの対処行動においても有意差が見られなかった。

### 3-2 将来の性役割行動とストレス対処行動の関連

本調査では，将来，「男性役割行動」や「女性役割行動」を自分が行うと思うかを聞いた。

将来の性役割行動の調査では，「女性役割行動項目」の5項目と「男性役割行動項目」の5項目について，「するだろう」「時々するだろう」「あまりしないだろう」「まったくしないだろう」の4件法で評定を求め，それらに4,3,2,1の点数を与えて得点化した。そして「男性役割行動項目」「女性役割行動項目」のそれぞれの平均値を算出し，「将来の男性役割行動得点」「将来の女性役割行動得点」とした。そして男女間で，「将来の男性役割行動得点」「将来の女性役割行動得点」に差があるのかを検討するため，性別を独立変数，将来の役割行動得点を従属変数としてt検定を行った（表7）。

その結果，「将来の男性役割行動」では，男性が女性よりも有意に得点が高かった。また，「将来の女性役割行動」では，女性が男性よりも有意に得点が高かった。（将来の男性役割行動得点： $t(212.22)=14.629$ ， $p<.01$ ，将来の女性役割行動得点： $t(179.73)=11.557$ ，

表5 現在の男性役割行動高群・低群における各対処行動の平均値・SDとt検定の結果

	高群(N=21)		低群(N=86)		t値
	平均	SD	平均	SD	
問題解決的対処	3.10	0.43	2.86	0.56	$t(105)=1.798$
サポート希求対処	3.07	1.74	2.79	0.57	$t(105)=1.258$
回避・情動的対処	2.44	0.47	2.50	0.56	$t(105)=0.510$

表6 現在の女性役割行動高群・低群における各対処行動の平均値・SDとt検定の結果

	高群(N=41)		低群(N=62)		t値
	平均	SD	平均	SD	
問題解決的対処	2.98	0.57	2.76	0.55	$t(101)=1.929$
サポート希求対処	2.78	0.55	2.63	0.71	$t(101)=1.119$
回避・情動的対処	2.62	0.48	2.52	0.66	$t(99.873)=0.862†$

†: Welchの方法

表7 将来の性役割行動得点の男女別平均値・SDとt検定の結果

	男性(N=127)		女性(N=105)		t値
	平均	SD	平均	SD	
将来の男性役割行動得点	3.55	0.36	2.85	0.52	$t(212.22)=14.629**†$
将来の女性役割行動得点	2.84	0.60	3.78	0.36	$t(179.73)=11.557**†$

†: Welchの方法 \*\*: $p<.01$



$p < .01$ )。

また、「将来の男性役割行動得点」や「将来の女性役割行動得点」の高群と低群で、ストレス対処行動に違いが見られるかを検討するため、「将来の男性役割行動得点」・「将来の女性役割行動得点」のそれぞれにおいて高群と低群に分け、ストレス対処行動得点を比較した。高群と低群を分ける際は、「将来の男性役割行動得点」が3.00以上の被験者を「将来の男性役割行動高群」とした。低群については、2.40以下の被験者を「将来の男性役割行動低群」とした。「将来の女性役割行動得点」についても同様に、「将来の女性役割行動得点」が3.00以上の被験者を「将来の女性役割行動高群」、2.40以下の被験者を「将来の女性役割行動低群」とした。

まず、男女を区別せずに、「将来の男性役割行動得点」の高群と低群間で各ストレス対処行動を比較した。分析対象は、「将来の男性役割行動得点」高群が172名(男性119名, 女性53名), 低群が31名(男性1名, 女性30名)であった。「将来の男性役割行動得点」の高群と低群間で、各ストレス対処行動得点を比較するため、「将来の男性役割行動得点」を独立変数, 各対処行動を従属変数として t

検定を行った(表8)。その結果, どの対処行動においても有意差が見られなかった。

また、「将来の女性役割行動得点」の高群と低群間で、ストレス対処行動を比較した。分析対象は、「将来の女性役割行動得点」高群が157名(男性55名, 女性102名), 低群が35名(男性34名, 女性1名)であった。「将来の女性役割行動得点」の高群と低群間で、各ストレス対処行動得点を比較するため、「将来の女性役割行動得点」の高群・低群を独立変数, 各対処行動を従属変数として, t 検定を行った(表9)。その結果, サポート希求対処において有意差が見られ, 将来の女性役割行動高群が, 将来の女性役割行動低群に比べてサポート希求対処の対処行動をより多く行っていた ( $t(190)=3.527, p < .01$ )。しかし, 問題解決の対処と情動・回避の対処においては, 有意な差は見られなかった。

#### 4. 子どもの遊びの行動とストレス対処行動の関連

子どもの遊び行動とストレス対処行動の関係を検討するに先立って、「子どもの遊び」項目に挙げられた遊びを, 実際に子どもの頃に行ったかどうかを調査した。「子どもの遊

表8 将来の男性役割行動における対処行動の平均値・SD と t 検定の結果

	高群(N=172)		低群(N=31)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
問題解決の対処	2.93	0.53	2.87	0.61	$t(201) = 0.563$
サポート希求対処	2.70	0.61	2.73	0.65	$t(201) = 0.229$
回避・情動的対処	2.44	0.58	2.42	0.49	$t(201) = 0.170$

表9 将来の女性役割行動における高群・低群の対処行動の平均値・SD と t 検定の結果

	高群(N=157)		低群(N=35)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
問題解決の対処	2.93	0.56	2.92	0.47	$t(190) = 0.029$
サポート希求対処	2.81	0.57	2.44	0.56	$t(190) = 3.527^{**}$
回避・情動的対処	2.57	0.55	2.41	0.57	$t(190) = 1.547$

\*\*: $p < .01$

び」の調査では、各質問項目に対して、「よくした」「時々した」「あまりしなかった」「まったくしなかった」の4件法で評定を求めたため、それらに4,3,2,1を割り当てて得点化した。その得点を、「男児の遊び」の2項目、「女兒の遊び」の2項目について項目平均値を算出し、男児の遊び行動得点、女兒の遊び行動得点を算出した。

これらの性に依存した遊び行動の経験度が、男女間で差があるのかを検討するために、性別を独立変数、各遊び行動得点を従属変数として、t検定を行った(表10)。その結果、女性に比べ男性は、男児の遊び行動得点が高く、男性に比べて女性は、女兒の遊び行動得点有意に高かった(男児の遊び行動得点： $t(230)=7.611, p<.01$ 、女兒の遊び行動得点： $t(230)=16.659, p<.01$ )。

次に、子どもの遊び行動が、ストレス対処行動に及ぼす影響を検討するために、まず、男女を分けずに分析した。「男児の遊び行動得点」が3.00以上の被験者を「男児の遊び行動高群」、2.00以下の被験者を「男児の遊び行動低群」とした。分析対象者は、男児の遊び行動高群で97名(男性77名、女性22名)、低群は82名(男性18名、女性64名)となった。

「男児の遊び行動」高群・低群間でストレス対処行動に差があるのかを検討するために、「男児の遊び行動」を独立変数、各対処行動得点を従属変数としてt検定を行った(表11)。

その結果、問題解決的対処において、「男児の遊び行動」高群が低群に比べて得点有意に高かった。また、情動・回避的対処において、男児の遊び低群が高群に比べて得点有意に高かった(問題解決的対処： $t(177)=3.172, p<.01$ 、情動・回避的対処： $t(177)=2.970, p<.01$ )。しかし、サポート希求対処については有意な差は見られなかった。

また、女兒の遊び行動が、ストレス対処行動に影響をしているのかを検討した。女兒の遊び行動についても、「女兒の遊び行動得点」が3.00以上の者を「女兒の遊び行動高群」、2.00以下の者を「女兒の遊び行動低群」とした。分析対象者は、女兒遊び行動高群が105名(男性17名、女性88名)、低群が103名(男性94名、女性9名)であった。「女兒遊び行動」高群・低群間で、ストレス対処行動に差があるのかを検討するために、「女兒の遊び行動」を独立変数、各ストレス対処行動を従属変数としてt検定を行った(表12)。その結果、

表10 子どもの遊び行動の男女の平均値とSD・t検定の結果

	男性(N=127)		女性(N=105)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
男児の遊び行動得点	2.94	0.77	2.17	0.77	$t(230) = 7.611^{**}$
女兒の遊び行動得点	1.85	0.73	3.39	0.66	$t(230) = 16.659^{**}$

\*\*: $p<.01$

表11 男児の遊び行動高群・低群の平均値・SD と t 検定の結果

	高群(N=97)		低群(N=82)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
問題解決的対処	3.02	0.52	2.77	0.52	$t(177) = 3.172^{**}$
サポート希求対処	2.71	0.59	2.78	0.57	$t(177) = 0.793$
情動・回避的対処	2.40	0.53	2.63	0.50	$t(177) = 2.970^{**}$

\*\*: $p<.01$

サポート希求対処において、女兒の遊び行動高群が低群よりも得点が有意に高かった ( $t(206)=3.587, p<.01$ )。また、情動・回避的対処において、女兒の遊び行動高群が低群よりも得点が有意に高かった ( $t(206)=4.222, p<.01$ )。しかし、問題解決的対処においては、有意な差は見られなかった。

## 考察

従来のストレス対処行動の性差を性役割の違いによって説明しようとする研究においては、性役割の測定に基づく性差とストレス対処行動の性差との間には一貫した関係が得られてこなかった。これは、従来用いられてきた性役割を測定する尺度が、公的な場における性性というよりも、人間性を測定するものと考えられ、したがってその尺度の結果には、性別に依存した性役割が表現されなかったからと推察された。そこで、本研究では、伝統的な性役割が根強く残っているとされる家庭での性役割を測定することによって、性別に依存した性役割が測定され、家庭における性役割認識によってストレス対処行動の性差が説明できると考えて、3つの仮説を設定し、その検証を行うことを目的とした。以下に、本研究で得られた結果をもとに、それらの仮説を検証し、家庭内の性役割がストレス対処行動に与える影響を考察していく。

### <仮説検証>

仮説1は、『ストレス場面において、男性

は女性よりも「問題解決的対処」を多く用いる。また、女性は男性よりも、「サポート希求対処」「情動・回避的対処」を多く用いる。』であった。

この仮説は、Lazarus & Folkman (1980) や、加藤 (1999) の報告から、ストレス場面において、男性は女性よりも「問題解決的対処」を多く用い、Endler & Parker (1990) の報告から、女性は男性よりも「情動・回避的対処」を多く用いると考えられた。また、金・小川 (1997) は、女性は男性よりも多く「サポート希求対処」を行うという報告に由来する仮説であった。

本研究では、「サポート希求対処」と「情動・回避的対処」では、女性が男性よりも得点が高かった。これにより、この部分においては、仮説は支持された。

「サポート希求対処」については、女性が男性よりもこの対処を多く用いる結果となり、これは金・小川 (1997) の結果と一致した。ストレス時に得られたサポートが、ストレスの知覚や反応に及ぼす影響を説明するために、Cohen & Wills (1985; 橋本, 2005 より) は、Lazarus & Folkman の提唱したストレス認知理論に、他者からのソーシャルサポートが果たす役割を加えた。

その中で、Cohen & Wills は、ソーシャルサポートは、ストレスの一次的評価に対して生じる「サポートを得られる」という認識が、ライフイベントを「自身にとって脅威となるもの」と評価させにくくすると説明した。ま

表12 女兒の遊び行動高群・低群の平均値・SD と t 検定の結果

	高群 (N = 105)		低群 (N = 103)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
問題解決的対処	2.97	0.51	2.86	0.60	$t(206) = 1.326$
サポート希求対処	2.85	0.58	2.55	0.63	$t(206) = 3.587^{**}$
情動・回避的対処	2.65	0.51	2.33	0.58	$t(206) = 4.222^{**}$

\*\* :  $p < .01$

た、「サポートを得られる」という認識や実際のサポートは、ストレス状況にある個人の適応的な対処行動を促進し、ストレスの再評価を促し、ストレス反応を低減させることを示した。我々の文化では、女性が男性よりも他者にサポートを得ることが認められていることを表している。

これらのことから、他者からのサポートを求める力は、ストレスの多い現代においては、精神的健康を維持しながら生きていくために不可欠な力であると考えられる。したがって、本研究に見られた男女差は、今後、女性への援助に加えて、男性が援助を求めることができるような働きかけや環境づくりの必要性を示唆するものであると考えられる。

「情動・回避的対処」についても、女性が男性よりも得点が高くなり、仮説を支持する結果となった。これは、Endler & Parker や早瀬 (2008) の結果と一致した。私的な場面においては、女性は、他者に援助を求めることに加えて、ストレスフルな状況で生じた情動をうまく発散したり、ストレスフルなものから遠ざかったり、多様な対処行動を行っていることが考えられる。

一方、「問題解決的対処」では、男女で差が見られず、「男性は女性よりも多く問題解決的対処を行う」という部分は支持されなかった。「問題解決的対処」については、先行研究において、Lazarus & Folkman (1984) と加藤 (2001) は、男性が女性よりも多く「問題解決的対処」を行うと報告し、金・小川 (1997) や早瀬 (2008) の研究では、女性が男性よりも「問題解決的対処」を多く用いるという矛盾する結果の報告であった。

このような結果になった理由には、調査時における社会事情の違いが考えられる。男女平等や、女性の社会進出が取り上げられる時代の中で育った現代の女性が、以前よりも積

極的に行動をするようになったと考えられる。児玉・杉本・松田 (2002) は、1990年代以降の大学生について、女子の青年期の変化は大きく、女子は活発で積極的になってきているが、一方で男子はおとなしく、優しくなっていると報告した。公的には男女平等が求められる現代社会では、女性も男性と同様に問題解決的な対応を求められ、男女に関係なくその能力を高めてきていると考えることができる。特に大学生では、男女に区別なく、問題解決的な行動を求められると考えられる。

したがって、金・小川や早瀬の先行研究において示された、女性が男性よりも「問題解決的対処」を行うという結果は、被験者の偏りだけでなく、女性がストレスフルな状況に積極的に取り組み、解決しようとするようになった現代の大学生男女の様相を反映させたと解釈することができる。今後、被験者を大学生に限らず、対象をより幅広くして、男女の「問題解決的対処」の性差を検討していく必要はあるが、女性にもストレス状況の解決が積極的に求められるとすると、今後「問題解決的対処」の男女差は、もっとあいまいになっていくと考えられる。

仮説2は、「男児の遊び」を多くした者、もしくは現在や将来「男性役割行動」を多くする者は、少ない者に比べて「問題解決的対処」を多く行う。「女児の遊び」を多くする者、もしくは現在や将来「女性役割行動」を多くする者は、少ない者に比べて「サポート希求対処」や「情動・回避的対処」を多く行う』であった。

家庭内における性役割がストレス対処行動に影響するのであれば、本研究の結果では、「男児の遊び」得点の高群、もしくは現在や将来の「男性役割行動」得点の高群は、低群に比べて「問題解決的対処」を多く行うこと

が期待された。一方、「女兒の遊び」得点の高群、もしくは現在や将来の「女性役割行動」得点の高群は、低群に比べて「サポート希求対処」「情動・回避的対処」を多く用いることが期待された。

本研究においては、性別を区別せず男女混合で分析した。その結果、家庭内における性役割行動尺度の「子どもの遊び」において、「男児の遊び」得点の高群は低群よりもストレス場面で「問題解決的対処」を多く用い、「男児の遊び」得点の低群は高群よりも「情動・回避的対処」を多く用いるという結果を得た。同様に、「女兒の遊び」得点の高群は低群よりも「サポート希求対処」「情動・回避的対処」を多く用いるという結果を得た。したがって、上記の仮説のうち「男児の遊び」「女兒の遊び」については、仮説は支持された。また、「男児の遊び」の得点が低いほうが、「情動・回避的対処」が多くなるという新たな視点を得た。

Block (1983) は、子どもの遊びは、興味や活動だけでなく、知的な発達やパーソナリティに影響することを報告した。その中で、女の子の遊びは、主に母親のまねをするものが多く、養育者の近くで遊ぶ傾向があったとした。また、女の子の遊び内容は、対人関係や社会についての理解に役に立つものが多いとした。一方、男の子が遊びに用いるおもちゃには、何らかの工夫や操作をすることが必要であると、男女の遊びにおける特徴の違いを指摘した。

このことを考慮すると、幼い頃、男児の遊びを多く行っていたものは、幼少期よりおもちゃの操作などを通して、問題解決的なスキルを身に付けたことが考えられる。また、女兒の遊びを多く行っていたものは、養育者の近くにいたことで他者の援助を受けやすく、また、多様な行動を模倣することによって獲

得したと考えられる。幼児期の遊びによって得た経験が、その後、ストレスをはじめとした課題に取り組む際の対処スタイルの基礎となり、ストレス対処行動が形成されたと考えることができる。

ストレス対処行動に見られる性差は、幼児期や児童期に、養育者から男児や女兒にふさわしいとされた遊びを行い、それにより培われた行動の様式を基礎にして、作り出されるものであることが推察される。しかし、現在および将来の「男性役割行動」の高群・低群間で、「問題解決的対処」の得点に差は見られなかった。一方、現在の「女性役割行動」の高群・低群間では、各ストレス対処行動得点の間には有意な差は見られなかったが、将来における「女性役割行動」の高群は、低群よりも「サポート希求」の得点が高くなった。しかし、「情動・回避的対処」については、差は見られなかった。

現在および、将来の「男性役割行動」と問題解決的対処行動との関係や、現在の「女性役割行動」とサポート希求対処や情動・回避的対処行動の関係、仮説を支持する結果が得られなかった理由には、性役割行動が行われる場面、ストレス対処行動が行われる場面の違いが考えられる。

すなわち、性役割行動の調査に当たっては、山田 (2002) や宇井 (2002) の研究を参考に「私的領域」と考えられる家庭での行動を調査したが、ストレス対処行動については、ストレス場面を想定せずに調査を行った。早瀬は、ストレスを感じる場面を家庭・学業・友人関係に分け、それらの場所に依じて、ストレス対処行動の頻度を検討した。その結果、男女共に家庭内のような私的領域では、学業や友人関係など、公の場でストレスを感じたときに比べて、問題解決的な対処行動をとらないことを示唆した。このことから、ストレ



ス対処行動を行う場所により、行動に違いが表れたと考えることもできる。

本研究においては、ストレス場面を限定しないことにより、被験者が自由にストレス場面を考え、その際のストレス対処行動の測定を試みた。しかし、ストレスを感じる場面を自由記述させ、その内容を見ると、多くの被験者が、ストレスを感じる場面を「課題がうまくいかないとき」、「テストの直前」、「アルバイトで理不尽に怒られたとき」、「友人に自慢話や愚痴を聞かされるとき」などを挙げた。それらの場面を想定して測定されたストレス対処行動は、公的領域における行動であったと考えられる。ストレスを感じる場面を、私的領域である家庭内に設定してストレス対処行動を測定していれば、仮説に立てたような結果が得られた可能性も考えられる。

仮説3は、『男性で性役割を明瞭に区別する人は、性役割を明瞭に区別しない人に比べて、「問題解決的対処」を多く行う。女性で性役割を明瞭に区別する人は、性役割を明瞭に区別しない人に比べて、「サポート希求対処」「情動・回避的対処」を多く行う』であった。

性役割を性別に応じて明瞭に区別している人は、性役割期待に沿って行動をしており、明瞭に区別しない人は、性役割に気を置かず行動している人だと考えられた。そこで、性役割を明瞭に区別する男性は、性役割を明瞭に区別しない男性に比べて「問題解決的対処」を多く行い、性役割を明瞭に区別する女性は、性役割を明瞭に区別しない女性に比べて、「サポート希求対処」「情動・回避的対処」の得点が高くなることが期待された。

本研究においては、「男性役割行動」と「女性役割行動」の区別明瞭群と不明瞭群で、各ストレス対処行動の得点を比較したが、どのストレス対処行動にも有意な差は見られな

かった。また、「子どもの遊び」についても、「男児の遊び」と「女児の遊び」の区別明瞭群と不明瞭群でも同様に、各ストレス対処行動に有意な差は見られなかった。したがって、仮説3は支持されなかった。

性役割行動を明瞭に男女に分けて区別している人と、区別していない人との間に、ストレス対処行動に差が見られなかったのは、仮説2と同様に、私たちは家庭内において、養育者からの影響により、幼いころより性別に応じた認識や行動をしており、それらは私たちの行動の基礎を築いている。しかし、家庭から離れて、学校などの公的領域では男女は平等であり、それに沿った認識や公の場面での振る舞いを習得していくと考えられる。そうであれば、今回の調査におけるストレス対処行動への回答は、公の場面での認識で回答が行われたのではないかと考えることができる。したがって、家庭内において性役割を区別しているか、区別していないかの認識は、行動に差を出現させなかったのは、これが原因となっていると考えることができる。

## 引用文献

- Block, J. H. (1983). Differential premises arising from differential socialization of the sexes: Some conjectures. *Child Development*, 54, 1335-1354.
- Cohen, S., & Wills, T. A. (1985). Stress, social support and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357. (橋本剛 (2005). ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版)
- Endler, N. S., & Parker, J. D. A. (1990). Multidimensional Assessment of Coping: A critical evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58 (5), 844-845.
- 古川 壽亮・鈴木ありさ・齊藤由美・濱中淑彦 (1993). CISS (Coping Inventory for Stressful Situation) 日本語版の信頼性と妥当性: 対処行

- 動の比較文化的研究への一寄与 精神神経学雑誌, 95, 602-621.
- 早瀬未紗 (2008). 青年期における性役割の認知がストレス対処行動に与える影響 平成20年度岐阜大学教育学部卒業論文.
- 加藤知可子 (1999). コーピングにおける性差 広島県立保健福祉短期大学紀要, 4(1), 13-16.
- 加藤知可子 (2001). 青年期におけるコーピング, 精神的健康に与える性役割の影響 日本看護研究学会雑誌, 24(1), 57-66.
- 金 愛慶・小川俊樹 (1997). コーピング行動の性差—性役割の観点から— 筑波大学心理学研究, 19, 79-90.
- 児玉真樹子・杉本明子・松田文子 (2002). 現代の男女大学生の性格特性と性役割認知 広島大学心理学研究, 2, 73-84.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1980). An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and social behavior*, 21, 219-239.
- 無藤清子 (2002). 心理臨床問題に見られるジェンダーの影響 伊藤裕子(編) ジェンダーの発達心理学, ミネルヴァ書房 pp. 224-251.
- 大井修三・今枝未紗 (2017) 社会的不適応と性役割期待 岐阜女子大学紀要, 第47号, 31-43.
- 大井修三・今枝未紗 (2019) 家庭内性役割認識尺度の構成と妥当性 岐阜女子大学紀要, 第48号, 29-36.
- 大井修三・今枝未紗 (2020) ストレス対処行動尺度の構成と対処行動における性差の検討, 岐阜女子大学紀要, 50巻, 1-9.
- 宇井美代子 (2002). 女子大学生における男女平等を判断する基準—公的・私的・個人領域との関連から— 青年心理学研究, 14, 41-55.
- 山田礼子 (2002). 男女大学生に見られるジェンダー観の比較—家庭内でのジェンダー観形成過程に注目して— 社会科学, 69, 1-33.